
幻想と魔法の協奏曲

天宮翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想と魔法の協奏曲

【Nコード】

N7926Y

【作者名】

天宮翔

【あらすじ】

桜芽吹く春の季節。海鳴市にある聖祥大付属小学校に通う新三年生の神城ユウヤは、新しいクラスに不安を覚えた。聖祥が誇る三大美少女の高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずかと同じクラスになってしまったのだ。このクラス分けに学園の陰謀を感じつつもとりあず決まったものは仕方ないと平静を保っているが、後に彼は様々な事件に巻き込まれていく―― 《この作品は忘却の魔法使いの改訂版です》

プロローグ

木々茂る森にて空を眺めていた。

桜咲く大木の枝から見る空は美しく、月見酒を足しにしても良いほどの星の海、黒き常闇の世界が視界に広がる。

どこまでも広がる闇海の空に怪しさを覚えるも、その美しさには感嘆を覚える。

「月夜には杯を交わすのもまた一考、と云うのもあながち間違いとは言えないね」

「ふふふ。そうでしょ？　こう云う日に呑む酒は美味しいと相場が決まっているのよ。それに、桜を見ながら月を見ながらお酒ってロマンチックじゃないかしら？」

「……ん。確かに間違えではないし、ロマンチックとも思うけど、子どもに酒を薦めるのは頂けないと思うよ」

年にして10を満たした程度の少年が片目を瞑り、枝の上で御猪口を手に残れたように苦笑を零した。

対して相手は夜闇から上半身しかない化け物と言えなくもない、年齢不詳の美しい金糸の髪、ナイトキャップ、チャイナ服を改良したものを着た女性であった。

そんな彼女はもうそんなことは気にしないと、可愛らしくも酒を薦める。

「だから何故薦めるんですか？」

「別に？　呑み終えたから御酌する。ただそれだけよ。他に意味があるかしら？」

酌をしながら不適な笑みを浮かべる妙齡な女性。二次成長を迎え

る男性たちにその姿は目の毒であろう。

「せめて年齢制限は考えて欲しいのだけどね」

「私にそれを言っても『はい、そうですか』とは言わないのも忘れずね」

「……もう良いよ」

御酌されたものを“すつ”と呑む。

お酒特有の酔いというものは感じないが、ただ一点を見据えながら呟く。

「学校、か」

明日から新学期に入るためこのような（法律上飲酒は20歳から）ことをやっている場合ではない、と内心苦笑した。

「そうね。明日から貴男はこちらに來れないのよね」

「まあ、今現在でここに居るのも不思議でならないけど」

「それは仕方ないわ。貴男の存在の境界が曖昧なのだから此処に居ると同時に向こうにも、その存在は認識できるの。本来なら有り得ない特異な存在だからよ」

「特異、ね。否定はしないけど、どうもむず痒いよ」

「そうかしら？　けど、そうね。確かに貴男は此処に來るべき人間じゃないわ。神隠しに合わない限りね」

どこからともなく扇子を取り出し、口元を隠す。その下には小さな微笑を浮かべているのだろう。

また意味深い言葉だが、その意を理解している僕にとっては何を今更と一言物申したいところである。

「……さて、他のみんなにも挨拶していかないとならないし、僕は行くよ?」

これ以上の会話は無意味だと判断し、木から降りた。無理やり過ぎたかもしれないが、これも時間が押しているのだから仕方がない。彼女だけに時間を割いている訳にもいかないのだから。

「ええ。貴男をずっと縛り付けていたいのだけど、後で痛い目に合うのだけは嫌だしお開きにしましょう」

だが彼女はその意をすんなり受け入れお酒と御猪口を引っ込めた。同時に上半身しか露わにしていなかった体が姿を表し、夜だというのに日傘を携えて僕の前に立つ。

「また来るのでしょうか?」

「わからない。確約できるものじゃないから曖昧な答えしかだせないよ」

寂しげな表情を見せるが、彼女の素顔を知る身ではあまりに感動できないのは人徳の差と言うべきなのだろう。

「そこは『絶対』と言うべきところですわ。女心を知らない殿方に育ちますわよ」

「『ですわ』って……。そういう君は僕を子どもと見てないよ。お酒に口調、果ては——自分で言ってる馬鹿馬鹿しいな」

「うふふ。だって貴男は子どもっぽいところが無さ過ぎるもの。まるで男」

「いやいや、僕は男だからね。男以外の何ものでもないよ」

そう反論するが呆れたような顔で“そうね”と言われる。

僕はその呆れ顔に納得がいかなかったが、話にならないと思いきれ以上は突っかかることをしなかった。

互いのやりとりが止まり、無言が続くという奇妙な空気が流れ話しが続かない。

だからここが切りどころだろうと思い、餞別の言葉を投げた。

「――それじゃあ、ね」

「……ええ。さようなら。貴男なら幻想郷は何時でも歓迎するわ。また来なさい」

「ああ。何時か来るよ、紫さん」

呆気ないやりとりだがこれは今日に始まったことではない。

うまく言葉には出来ないがこれこそ僕と彼女の別れの挨拶だった。

彼女に背を向け、僕は森から外へ向かう。明日から新学期――憂鬱である。

第1話 少年と桜

桜芽吹く春の季節。

出会いと別れの節目、新学期。

新しい学年、新しいクラス、新しい友人、新しい日常。

何もかもが新鮮な始まりの今日を迎えたというのに、ひとりの少年が憂鬱そうな顔でクラス表を見ていた。

「これは現実かな？」

泣きたい。泣き出したい。

そんな彼の心境は現実を背ける、その一言が心中を占めていた。何故彼がそう感じているのであろうか。ただの一小学生が背けたくなるほどに根を上げる理由。

「やったわね。また一緒のクラスよ」

「ほんとだ！ 今年も一緒のクラスだよ、なのはちゃん、アリサちゃん」

「うん。良かったなの」

クラス表を見ながらハイタッチを醸す三人の美少女。

此処、聖祥大付属小学校のアイドルと言って過言ではない、アリサ・バニングス、月村すずか、高町なのはの三姫である。

そんな彼は彼女たちと同じクラス、クラスメートの一員になった。普通の子どもなら可愛い女の子と同じクラスになって嬉しく、照れているところかもしれない。

だが彼は、彼女たちに少なくとも苦手意識が持っている。それが理由であった。

「今年は厄日かな」

空は彼のような曇天ではなく、雲一つない青々とした青天が広がっていた。



新しいクラスに入り、現実逃避としてすぐさま席でうつ伏せとなる。

時間が経つに連れ続々と教室には新しいクラスメートが集っていく。

先生が教室に入る。ホームルームの時間だと覚ますと新たな絶望が彼を襲った。

「あ。お隣だね。高町なのはです！ よろしくね。あなたの名前は？」

その言葉からクラスが同じだけでなく隣になってしまった三姫のひとりからの声を掛けられた。……死刑宣告だった。

——この世界に神はいない。

そう思ったのは言うまでもないだろう。

加えて、高町なのはの前はアリサ・バニングス、後ろは月村すずかと三姫が縦一列に並んでいた。

彼は小さな溜め息と共に言葉を吐く。

「……厄神さまに厄を祓って貰おうかな」
「えっ？」

彼の呪詛のような言葉になのはが反応を示すが、何事もなかったように言葉を返す。平然に普通に。

「いや、何でもないよ。僕の名前は神城ユウヤ。よろしくね、高町さん」

「うん。よろしく、ユウヤ君。私のことも高町じゃなくて『なのは』って呼んでね」

「……わかった。じゃあ、なのはちゃん。これから一年間よろしく」

偽りも虚偽もない、ただただ何事もない平凡な挨拶を彼は交わした。

その後ろで少し不満そうに寂しげな瞳と殺気を帯びたような瞳を当てられているのに気づきながら……。

（面倒くさい臭がぷんぷんしてるな。本当に世界はままならない）

毒づき、心の内で世界の有り様を漏らした。今日も平和でありますように。



学校が終わるとユウヤはすぐさま教室を飛び出す。

後ろから声を掛けられたが振り向いている暇などない。

彼はあつという間に姿を消した。

向かう先は海鳴市の桜ヶ丘。

枯れず桜と呼ばれる樹齡千を超えると言われていた大きな桜が聳え

る丘である。

その木は四季に関わらず咲き続ける、海鳴市の名物のひとつでありながら伝説。

桜ヶ丘の土地の大半を覆う森のどこかにあるとされており、姿は見えずそこに辿り着いたものは極僅かと言われ、オカルト研究者も驚く、七不思議のひとつとされているため伝説とされている。

また、桜ヶ丘自体が名所として名を連ねており、遠からず枯れず桜を見ようと訪れる観光客も多く盛んな場所でもあった。

そんな伝説の不思議な木がある森林地帯を宛もなく彼はさ迷う。しばらくすると薄暗い森の中に光が射す。それを見たユウヤは頬が弛む。

「ふふ、ようやく到着か」

桜ヶ丘の森林地帯に入り10分。

枯れず桜が聳える中心にやってきた。

人がなかなか辿り着けない秘境は不思議と明るく、美しい。

彼が何故此処に來れているのかはわからない。ただ此処は彼にとって誰にも邪魔をされない癒やしの地だというだけである。

第2話 少女と約束

唄が聞こえる。

どこまでも透き通る美しい美声。

どこか懐かしさを覚える。一体これは――

「つつん？ 寝てたのか……」

日だまりの下、読書をしていると何時の間にか寝ていたようだ。
寝ぼけていた意識が覚醒していく。

「あれは……」

歌声の先に目が行く。

そこには美しい金糸の髪。彫りが深く整った顔立ち。何より目立つの髪と同じ色彩を持つ金に近い黄土色の瞳。

その容貌は完成されつくした女神。天女のような同い年の少女が桜の中で舞っていた。と、ふいに少女と目が合う。

「……………」

「……………」

気まずい空気が流れた。

舞を踊っていた少女が急に動きを止めこちらを見つめてくる。

切り出す言葉が互いに見つからず視線が合う。すると、少女の頬が赤く染まった。

「あ、ああ……！ し、失礼しました！！」

「えっ？ ちょっ！？」

突然彼女は走り出した。

一瞬、何が思考が停止しかけたが、すぐさま彼女を呼び止め走り出す。

しかし、彼女は静止を聞かず走り続ける。聞こえていないのか？

「その君、待って！」

「ご、ごめなさーい！！！」

彼女は謝罪をしながら更に逃げるスピードを上げる。

足に自信があるが、女性にしては彼女はかなり速く、追い付きそうで追いつけない。と、言うよりさっきから何故謝っているんだ？話が噛み合っていない。

僕に何か悪いことをしたと思ってるのか？ ……あり得るかも。

「待って！ 何も君が僕に悪いことをした訳じゃないよ。だから、逃げないで！！！」

「ふへ？」

「あ、止まってくれ……って、急に止まったりしたら——うわああっ！！！」

「えっ！？ きゃあああっ！！！」

ようやく足を止めてくれた彼女。

逃げるのを止めてくれて良かったと思ったのも束の間、僕自身追いかけていたのを忘れており、そのまま慣性の法則に逆らうことなく、彼女とぶつかった。

「ってて……。ごめん、大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です」

足を止めることが出来ず、ぶつかってしまったが彼女には怪我をしないよう防いだので、抱き合った格好ながら無事を確認しあう。そんな中、女の子特有の柔らかさと香りがするが、意識することはなかった。

彼女も同じく男に対する意識はないように見える。と、ずっとこのままはな。

「さあ、手を」

「う、うん」

彼女の陶磁器のような白い手を取り、引っ張り上げた。

「さつきはごめんね？」

「いえ。私がかつてに逃げてこんなことになっちゃいましたから……すみません」

「それでも僕が君を追いかねなければこんなことにならなかったよ」

見たところ彼女に怪我はなく、服が少し汚れてしまっているが気にならない程度だろう。だが、彼女は女性である。

女の子が泥だらけというのは――

「少し待ってて」

「え？」

「フォロウ！ お前が近くに居るのは知っている。彼女のことをお願いしたい」

僕の声が森に広がる。

彼女は小首を傾げていたが、その時何かが僕らの前に現れた。

「了解しました」

その姿はメイド服を着た女性。
黒に近い銀の髪を一束に流した銀の瞳を持った傾国の姫を思わす
容貌。

先の少女を大人にしたような美しい女性だった。だがそれは異質
過ぎた。

「ふへ？」

「少々お時間を頂きます、お嬢様」

次の瞬間、僕の言葉を汲んでフォロウは彼女の服を綺麗に仕上げ
る。

その速さは異常であり、一瞬と言っても過言ではない。
瞬きするとともに終わっていた。

「えっ？ これって……」

「少々手間取りましたがこのようなものでよろしいでしょうか？」

「うん。ありがとう。フォロウは下がって良いよ。居たいなら構わ
ないけど？」

「いえ。今回はお邪魔かと思えますので退かして貰います。では――
」

フォロウは姿を消した。

まるで忍者のような足運びだが、彼女はれっきとしたメイドであ
る。

と言うより何がお邪魔なのかわからないんだけど……。と、彼女
を見る。

ん？ 服が綺麗になって、フォロウが突然消えたのに驚いたのか
な？

って、そりゃ普通の反応か。一応、説明とか諸々しないといけないね。

「と、それじゃあ。お互い自己紹介といこう。良いかな？」

「へ？ はい、良いですよ」

「そんなに緊張しないで。フォロウの説明も、君が訊きたいことも全部喋るからね」

「っ！ わかりました。では自己紹介ですよ。私の名前は夏樹果凜と言います」

急なことに早口で自己紹介をする彼女。

同年年にしては大人びた容貌を持つ彼女にしては喋り方が子どもっぽいと思った。

まあ、年相応に似つかわしくない言葉遣いだけど。……自分も人のこと言えないか。くすっ。

それにしても、夏樹か。

これもまた、因果かな――

「夏樹、果凜さんか。うん。良い名前だね。僕の名前は神城ユウヤ。改めてよろしく、夏樹果凜さん」

「はい。こちらこそよろしくお願いしますね、ユウヤさん」

僕らは互いに微笑みを浮かべた。

そして、たわいのない話を始める。

どうして此処に居たのか。何処の学校？ 何年生？ フォロウさんって何者？

なんてものなど、世間話に変わらないものまで、時間が経つのすら忘れてずっと、夕日が落ちるまで喋り続けた。



時間が経つのは早いがとても濃厚な充実したものだった。今までに類を見ないほど喋ったのではないだろうか。

彼女も喋り続けたことにより少し疲れが見える。頬をも紅潮していた。

そうして、時間も遅いということで明るい内に森から出る。

桜ヶ丘の公園に出ると互いに言葉が出なかった。まだ喋り足りないさそうな顔をしていたが、もう夜は近い。

だから僕は彼女に良かれと思う言葉を選ぶ。外していたら悔しいけど――

「もう夜も近いから今日はここで解散にしよう」

「……はい」

「ふふ。そんなあからさまに落ち込まないで。僕らはもう友達だよ。時間の都合が合えばまたお話ししようよ」

「えっ？ うん。うん。またお話ししよう！！ 約束だよ」

「うん。約束」

まだ出会って間もない僕らはひとつの約束、誓いを立てた。

――『この枯れず桜の前でもう一度』

友達になる時間など関係ない。

互いが意識し、良好な関係を結べると思えばそこから友達と呼べる。

そう僕は思っている。

彼女もそう思っていると良いなと思いながら、互いの帰路についた。

これが僕と果凜の出会いと成り染め。

桜咲く春、僕は絹のような金糸の髪を持つ少女に出会う。

その姿はまるで天女を思わせる、穢れを知らない美しき聖女。

——その名は夏樹果凜。

彼女との出会いは運命だった。

同時に、これが始まりだったのかもしれない。

彼女は僕の運命を左右する存在。

これから起きる不思議な物語の幕開けと僕の運命が決まった日でもあった。

第3話 学校は危険がいっぱい

夏樹果凜と出会って数週間が過ぎた。

翌日から本格的な授業が始まり、新しいクラスでは仲良しグループの派閥が幾つか作られ始めた。

そんな中僕はクラスに未だ馴染めないでいた。孤立し、一匹狼を演じつつある。

理由としては積極的にクラスの人間と関わりを持たないことが主な原因であり、孤立した方が人に合わせなくてすむ。

また、動きが制限されないと考えており、クラスメートとの関係はどっちつかず、最低限度の付き合いしかしていない。

そんな日常を謳歌している中、寂しさを感じるかと言われれば『ない』と答えるだろう。――ひとりは楽である。

これが僕の学園でのスタンスであり、平穏と不穏を交える身を保つ、僕がクラスに馴染まない理由である。

しかしながら、彼女等は土足で領内に侵入してくる。

「ねえ。起きて」

「……………」

「起きてよ」

「……………」

「ああ。いい加減に起きなさいっでば!!」

「ぐべらっ?!」

我関せずを実行している中、夢の世界に旅立っていると凄まじい衝撃が脳を揺らした。な、何だ? 敵襲か!?

上体を起こすと茶色の髪と金色の髪が目に入ってきた。

徐々に視線を上に向けるとひとりは苦笑を浮かべ、ひとりは怒り

を露わにしている。どうやら時間は昼休みになっており、起こしてくれようだ。

しかし、何故起こした？ 何故叩かれた？ 何故怒っている？ 疑問は尽きないが、ひとつだけ言えることがある。

「……僕は寝ます」

彼女等と関わりを持ちたくない僕は再び夢の世界に旅立った。

バーニング？

バーニングさんが僕の言動、行動に再び怒りを上げるが知ったことではない。

起こしてくれたのには感謝すれど、眠りたい時に無理に起こすな。1日は二十四時間。

時間は有限であり、有意義に使わなければならない。ああ、かったるい。

と、言うより二人より控えめだが背後にはすずかも居たな。

あんな起こしたする前に止めてくれよ。——本当に世界は非情である。



その後、何度か叩かれ殴られそうになったが、危機察知能力が働いたのかそれらを寸でのところで回避していた。

バーニングさんは「何で避けられるのよ!？」と声を荒げた。

因みに返答は「痛いのが嫌いだから？」と答えてやった。

そして、再三に渡り異常なまでの怒りに肝を冷やしたが、なのはちゃんとすずかが止めに入り事なきを得た。

その後、二人の説得によりバニングスさんは怒りを収めたが「名前で呼びなさい」と突然言われた。

何で？と訊ねると「私だけが名字なのが気にいらぬ」と言われる。

手始めに名前で呼ぶと少しだけ気分がよくなったが。

本当。女の子って何を考えているかわからない。それに……。

「この不可思議な視線は何だ？」

何かしたかな、僕？

ま、そろそろ向こうから接触してくるだろう。その時にわかることだ。

そう楽観的に考えて残り時間は少くないがようやく寝ることが出来る。

夢の世界へ旅立とうと机にうつ伏せになろうとした、が、肩を掴まれた。

アリサとは違う凄みを感じ、徐々に顔を後ろに向ける。

そこには笑顔だけど背後にスタンドである阿修羅様が控えた、すずかの姿。

友人であるのはちゃんとアリサは一步後ずさる。

はい。今日の僕の運勢はマイナス値なんですわ。わかります。

その後、僕は本当の意味で夢の世界に旅立った。

同時にすずかには逆らってはいけない、そう改めて思い知った。

しかし、すずかさん。幼馴染と言えどこの仕打ちは酷いと思うよ。

威圧感がハンパないです。

で、さっきからずっと感じてる憐れみ以外の視線は何だろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7926y/>

幻想と魔法の協奏曲

2011年11月29日22時29分発行